

「子どもの発達と環境要因」授業報告書

教育臨床 水口啓吾

授業情報

授業名 子どもの発達と環境要因

開講 2021年度後学期金曜日1時限目

受講者数 8名（心理臨床発達専攻1年生）

授業概要 近年、子どもの学習を捉えるうえで、ワーキングメモリ（Working Memory）が重要な役割を担っていることが報告されている。本授業では、子どもの学習での躓きをワーキングメモリの観点から把握すると共に、ワーキングメモリの観点からの支援方法について理解を深めていく。

授業スケジュール

第1回：オリエンテーション

第2回：ワーキングメモリの基礎知識（講義）

第3回：ワーキングメモリと学習（講義）

第4回：ワーキングメモリと学習支援（講義）

第5回：学生発表（輪読）とロールプレイ①

第6回：学生発表（輪読）とロールプレイ②

第7回：学生発表（輪読）とロールプレイ③

第8回：学生発表（輪読）とロールプレイ④

第9回：学生発表（輪読）とロールプレイ⑤

第10回：学生発表（輪読）とロールプレイ⑥

第11回：学生発表（輪読）とロールプレイ⑦

第12回：学生発表（輪読）とロールプレイ⑧

第13回：事例検討会①

第14回：事例検討会②

第15回：まとめ

授業到達目標

- ① 現在の教育現場における発達障害児の抱える困難さおよび問題の背景について心理学的視点から説明できる。
- ② ワーキングメモリの観点を、教育現場でどのように活かすことが可能であるかについて、具体的に述べることができる。
- ③ 具体的事例の検討を通じて、困難を抱えた子どもを取り巻く環境への働きかけについても実践的に考察することができる。

授業形態

本授業は講義形式と演習形式を用いて実施した。

●講義形式の授業では、テーマに関連する動画の視聴や最近のニュースの紹介を行い、受講生の関心を高める努力を行った。授業スタイルとしては、配布資料に適宜、穴埋めを設定し、受講生が授業中のスライドを見て記入する形を採用していた。

●演習形式の授業では、教科書の各章を受講生に振り分けて発表を行ってもらい、発表内容（テーマ）を踏まえ、受講生同士でディスカッションを行った。また、教科書に紹介されている、ワーキングメモリの観点からの学習支援を実際に授業でも実践して効果の検証を行った。その際は、学生同士でペアとなり、教師役（支援者）と子ども役でロールプレイを行い、学生はいずれの役も体験した。

以上を踏まえ、受講生自身に授業への積極度を高めてもらうと同時に、「授業で重要な内容は何か」を常に意識してもらえるように努めた。

授業アンケート

以下、授業アンケートの結果を示す（回答率75%）。

【知識・理解】学校や地域における臨床心理学的支援に必要な、生涯発達・教育、臨床心理学、精神保健医療に関する専門的知識を習得することができた。

とてもそう思う：3名（50%）

ある程度そう思う：3名（50%）

【技能】学校や地域における教育的支援、臨床心理学的支援にかかわる高い技能を身につけることができた。

とてもそう思う：3名（50%）

ある程度そう思う：3名（50%）

【思考・判断・表現】生涯発達と教育、心の健康にかかわる現代的諸課題について、幅広く専門的な知見をもとに、その対応方策を適切に考え、高度な実践力をもって臨床的支援に取り組むことができた。

とてもそう思う：3名（50%）

ある程度そう思う：2名（33%）

あまりそう思わない：1名（17%）

【関心・意欲・態度】心の健康に対する社会のニーズと自己の学習課題・研究課題を明確に意識し、実践を省察しつつ先導的に学習し研究する高度な実践力をもった専門的職業人として、自己の使命と責任とを自覚し、自主的に社会に貢献しようと思えた。

とてもそう思う：3名（50%）

ある程度そう思う：3名（50%）

【自由記述（抜粋）】

○ペアワークで実践的に教師役と子ども役両方を経験できたことによって、両方からの視点で学習内容について考えることができ、より良い学習の支援を学ぶことができた。○ロールプレイでそれぞれが実際に教師側になって、より分かりやすい授業（学習支援）になるように授業資料作りに取り組むことができた。○子ども側になってフィードバックができる機会があったため、より理解が深まった。

○意見を言い合える機会（時間）がもう少しあっても良いと思う。

授業改善点

受講生の“生の声”が授業中に確認できるディスカッションの機会をもっと作るべきであった。学生同士での話し合いだけではなく、教員との意見交換の場を増やすことで、より受講生の授業内容の理解を深化させることができるため、その機会が少なかった事が反省点である。

また、講義形式の改善点としては、授業資料は穴埋めスタイルを採用していたが、情報量が多いことは事実である。そのため、受講生にとって「どの内容が重要であるのか」が分かりやすくなるように工夫をすべきであった。そのため、今後は、単純に内容を説明するのではなく、「ここは重要です」、「この内容は補足的に理解してください」といったように、適宜、言語的な情報提供を取り入れていきたいと考える。